

# 聴覚障害幼児児童のかな文字の読みの習得と それに関わる要因の検討

○岡田佳奈  
(筑波大学附属聴覚特別支援学校)

左藤 敦子  
(筑波大学人間系)

KEY WORDS : 聴覚障害 習得文字数 音韻意識

## 【目的】

聴覚障害児教育において、かな文字は、幼児期からの言語指導の重要なツールの一つであると考えられる。国立国語研究所（1972）においては健聴児は就学前の段階から、高い水準でひらがなの読み書きが可能となっていることが示されている。また、ひらがなの読み書きには音韻意識や様々な要因が関連することが示唆されてきた（天野, 1970）。その一方で、聴覚障害児の音韻意識の発達は健聴児とは異なることが指摘されているが（斎藤, 1978）、聴覚障害児のかな文字の習得に関する研究はそれほど多くはない。

本研究では、聴覚障害のある幼児および児童のかな文字の読みの習得の実態を明らかにし、かな文字習得と音韻意識との関連性を改めて検討することを目的とする。

## 【方法】

1. 対象 A 特別支援学校（聴覚障害）幼稚部に在籍する 4 歳児・5 歳児、小学部に在籍する 1 年生・2 年生の計 27 名を対象とした。A 特別支援学校（聴覚障害）幼稚部では、かな文字自体の指導は行っていないが、日常的な指導や幼稚部の活動のなかでかな文字は使用されていた。

2. 手続き (1) 文字の読み課題: 幼稚部の 4 歳児・5 歳児、小学部の 1 年生・2 年生に実施した。国立国語研究所（1972）を参考に、ひらがなおよびカタカナの各 71 文字、各々の特殊音節を呈示して読ませた。なお、難易度を考慮し、幼児にはカタカナの特殊音節の課題は実施しなかった。

(2) 音韻意識に関わる課題: 幼稚部の 5 歳児と、小学部の 1 年生・2 年生に実施した。①音節分解課題: 押すと光るスイッチを使用し、図版で呈示した単語を音節分解させた。課題が「らくだ」の場合、「ら/く/だ」と三つのスイッチを押すことができれば正答とした。②音節抽出課題: 積み木の立方体（3 cm×3 cm）を使用し、図版で呈示した単語を音節分解させたあと、語頭・語中・語尾について、それぞれの積み木に対応する音をたずねた。課題が「らくだ」の場合、語頭「ら」、語中「く」、語尾「だ」を回答できれば正答とした。

3. 倫理的配慮 対象の幼児児童およびその保護者へ、研究内容と倫理的配慮について説明を行い、同意を得た。

## 【結果】

1. ひらがなおよびカタカナにおける読字数 各学年のひらがなおよびカタカナの各 71 文字の読み課題と特殊音節の読み課題の結果の一部を Table1 および Table2 に示した。なお特殊音節の読み課題においては小学部の対象児の正答率はいずれも 100%であった。

2. 音節分解の特徴 直音節の音節分解課題の平均正答率は、5 歳児 (n=7) が 94.2%、1 年生 (n=5) が 92.0%、2 年生 (n=7) が 100.0%であった。特殊音節の分解課題においては、5 歳児の段階から、音節や拍に加え、文字を単位とした分解がみられた。

3. 音節抽出の特徴 対象児 19 名のうち、課題内容を理解し、課題を実施することができた 17 名は、すべての課題において 100%の正答率であった。

## 【考察】

かな文字の読み課題の結果から、聴覚障害幼児は就学前の

Table1 かな文字各 71 字の平均読字数（字）

	ひらがな (SD)	カタカナ (SD)
4 歳児	41.1 字 (32.6)	33.0 字 (32.6)
5 歳児	70.4 字 (1.4)	58.4 字 (21.9)
1 年生	71.0 字 (0.0)	69.6 字 (2.3)
2 年生	71.0 字 (0.0)	70.6 字 (0.7)

Table2 ひらがなの特殊音節の読み課題の平均正答率（%）

	長音	促音	拗音	拗長音
4 歳児	35.7	9.5	16.7	28.6
5 歳児	61.9	100.0	97.6	76.2

段階から非常に高い水準でひらがなおよびカタカナの読字が可能となっていることが示唆された。5 歳児のひらがなの平均読字数は、島村ら（1994）よりも本研究のほうが多かった。この要因として、A 特別支援学校の文字を意識した環境づくりと指導が読字数の増加を促進させた可能性が考えられる。また、太田ら（2018）も指摘しているように、幼児を取り巻く環境が変化しており、社会全体の情報化も影響していることも推察された。これらから、聴覚障害の有無にかかわらず生じられた要因と、聴覚障害特有の要因が複合的に組み合わさり、相対的に平均読字数が高くなったことが示唆された。また、ひらがなの読字数とカタカナの読字数については、全学年でひらがなの方がカタカナよりも平均読字数が高かったことから、文字に触れる頻度や字形等の文字特性も読みの習得に関わることが推察された。一方、ひらがなの読字がある程度可能となっている対象児は、カタカナの読字数も多かったことから、かな文字の 1 文字に 1 音が対応しているというルールの習得によって、カタカナも幼児期の段階で読字が可能となることがうかがえた。聴覚障害児は言語力において課題があるとされてきたが、聴覚障害児は高い水準で読字が可能であったことから、読字と単語や文字を読み、意味が理解できることが解離している可能性も示唆された。

また本研究では、5 歳児の段階で音韻意識に関わる課題の遂行が可能となっており、かな文字の習得と音韻意識の関係性については言及できなかった。今後、課題内容と対象児の年齢段階も考慮する必要があると考える。

## 引用文献

天野（1970）語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習. 教育心理学研究, 18(2), 12-25.

太田ら（2018）幼稚園年長児におけるひらがな読み書きの習得度. 音声言語医学, 59(1), 9-15.

斎藤（1978）聴覚障害児における単語の音節分解および抽出に関する研究. 東京教育大学教育学部紀要, 24, 205-213.

島村ら（1994）幼児のひらがなの習得-国立国語研究所の 1967 年の調査との比較を通して. 教育心理学研究, 42(1), 70-76.

国立国語研究所（1972）幼児の読み書き能力. 東京書籍  
(Kana OKADA, Atsuko SATO)